

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21730494

研究課題名（和文）

曖昧な態度とはなにか：態度の動態的測定と2重態度理論による両面性の理解

研究課題名（英文）

Ambivalent attitudes: Dynamical Attitude assessment and dual process theories of attitudes

研究代表者

森尾 博昭 (MORIO HIROAKI)

関西大学・総合情報学部・教授

研究者番号：80361559

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、態度の両価性について、複雑系理論の枠組みに基づいた態度の動態的性質として概念化を行い、現在社会心理学において盛んに研究が行われている顕在的・潜在的態度の二分法に基づく2重態度理論の視点から検討を試み、統合的に理解することである。マウス・パラダイムによって動態的測定を行う本実験においては、態度の両価性が高い場合において、システマティックな処理がより促進されるという仮説の元に、上記のような認知的処理の水準の深さに影響を与える要因の効果を実験的に検討した。

研究成果の概要（英文）：

Purpose of this study is to conceptualize the ambivalence of attitudes based on the complex systems theory and dynamical assessment of attitudes, and to examine its nature from a viewpoint of the dichotomy of implicit and explicit attitudes. Using the mouse paradigm, with the hypothesis that systematic processing of attitudes is promoted only when attitude ambivalence is high, theoretical and empirical research was conducted to examine the effect of attitude ambivalence on the level of cognitive processing.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：態度変容、潜在的態度、複雑系理論、2重態度

1. 研究開始当初の背景

社会心理学において「態度」を測定する時、多くの場合想定されているのは、その対象に対して人々が持つ態度が肯定的・否定的の1次元の構造を持つということである。ある対象についてどれほど望ましいと考えるか、という評価の次元での単一の値が個人の態度として存在し、その個人の対象に対する接近・回避といった行動を導く、という考え方である。だが、様々な社会的事象に対する態度は、そのような評価の側面だけでは十分に理解することができないことは多くの社会心理学者によって認識されてきた。例えば、ある人物に対して愛憎の矛盾する感情を持っていた場合など、評価は肯定的から否定的まで極端に揺れ動くことになる。従来の手法では、このような変化は誤差であると考え、評価は中立的であるとみなされる。すると、ほとんど知識がなく、好きでも嫌いでもない人物の評価と同等であることになってしまう。愛憎と無関心は、しかしその感情が持つ意味も行動に与える影響も非常に異なるものであり、この二つを区別する必要がある。これは態度の両価性の問題である(Wilson, Linsey, & Schooler, 2000)。

本研究では、この両価性について、複雑系理論の枠組みを参考に、態度に内在的に存在する動態的性質を鍵としてアプローチする(Nowak, 2004)。複雑系理論の枠組みでは、時間とともに変化する事象を数学的なモデルとして表現することを目的とする。これらのモデルでは、外部からの刺激がなくとも変化し続ける事象において、一見ランダムに見える変化が、内在するダイナミクスに従って現れるものであることが示される。態度研究においても、従来、ノイズであると考えられてきたような、時間とともに変化する人々の態度に内在するダイナミクスを検討することにより、両価性の核心へと迫ることができると期待される。この枠組みでは、両価性とはすなわち、ポジティブとネガティブの間を振り子のように揺れ動く評価の状態であり、それは制止して動かないが故にニュートラルを示す評価とは明確に区別される。研究代表者は、自尊心を対象に評価に内在するダイナミクスを検討することの重要性を示してきた(森尾・山口, 2007)本研究では、社会的な態度全般に対してこのアプローチを行い、知見の一般化を目指す。

この複雑系理論を援用した動態的性質のモデル化に加え、本研究では既存の主要な社会心理学的な態度理論との整合性を検討していく。本研究で取り扱うアプローチは2重態度理論と呼ばれるものである(Wilson, Linsey, & Schooler, 2000)。ステレオタイプ

や偏見の研究などを通じて、質問項目などを用いて測定された態度は、回答者が自らの持つ態度についてアクセスし、報告するという一連のプロセスにおいて社会的望ましさや自己呈示動機など様々なバイアスの影響を受けることは古くから知られている。Greenwald & Banaji (1995)は個人が自ら自覚することができないが行動に影響を与えるような態度が存在するとし、これを潜在的態度と呼んだ。潜在的態度と区別するため、従来の質問紙を用いて測定される態度は顕在的態度と呼ばれる。潜在的態度は、概念間の連合の強さを示す反応速度などで測定され、顕在的態度とは異なる振る舞いを見せる。また、顕在的・潜在的態度の区別は、顕在的・潜在的な認知的処理過程とも対応する。このような2重の認知処理過程の存在を想定する精緻化見込みモデルなどに基づいて、多くの実証的知見が積み重ねられている。本研究では、測定された態度の動態的性質が、顕在的・潜在的な態度、および認知過程とどのような対応関係にあるのかもあわせて明らかにすることにより、多くの研究者によって精力的に研究が行われている2重態度理論の理解へと貢献することが期待される。

2. 研究の目的

本研究では、時と共に変化する人々の心情を測定する手法を検討し、従来の枠組みでの態度研究との比較を目的とする。時系列データの測定ツールとして、マウス・パラダイムと呼ばれる手法を利用する。この手法では、人々は自らの心の動きをコンピュータの画面上でマウス・ポインタを動かすことによって表現する。この表現された心の動きは、後に複雑系理論を応用した分析方法の対象となる。この手法は、自己評価や社会的態度の動態的測定を目的として開発された。

マウス・パラダイムでは、研究対象者が動かすマウス・ポインタの座標は、時系列データとして保存される。複数項目に対する回答を平均するなどして1次元上の数値として表される、質問紙による態度の測定とは異なり、マウス・パラダイムでは時間的解像度に応じて非常に多くの(たとえば100msを単位とした30秒の測定では300個の)反応が生成される。この瞬間の評価の積み重ねから内在的に存在するダイナミクスをどのように指標化するかが複雑系理論の応用では鍵となる。Vallacher, Nowak, & Kaufman (1994)の提唱する変化の早さ、加速度、停滞といった動態的指標に加え、森尾・山口(2007)の用いた力動性指標などを土台にして、より信頼性・妥当性の高い指標を確立することを第1のステップとする。妥当性の検討は、2

重態度理論が想定する顕在的態度と潜在的態度との関連性を軸に行う。このようにして確立された態度の動態的指標は、態度の両価性として概念化できることを示す。

次に、精緻化見込みモデルに代表される認知処理の2重過程モデルにおいて態度変容に影響を与えることが知られている要因に対して、態度の動態的指標がどのような役割を果たすのかを実験的に検討する。従来検討されることなかった動態的指標は、説得的コミュニケーションにおいて、調整変数として機能すると考えられる。

3. 研究の方法

Peng & Nisbett (1999) は推論と判断において、東アジアの人々の方がヨーロッパの人々よりも「弁証法的である」という主張を行った。リッカート尺度を用いた場合、このような弁証法的思考をとらえることは難しい。そこで、マウス・パラダイムと呼ばれる手法を用いる必要がある。

森尾(2003)は、マウス・パラダイムを用いて、従来の心理学の理論では静的な測定対象として扱われてきた態度を、力学系理論におけるアトラクターとして概念化することによって、時間の経過とともに生じる内発的な評価の変化を点ではなく構造(アトラクター・ランドスケープ)として理解することができると提唱した。

この理論を実証的に検証するため、森尾(2003)はさまざまな道徳的行動を対象として、マウス・パラダイムと呼ばれる手法によって態度を動的に測定した。この手法では、数10秒という比較的短い時間枠において、外部からの刺激の存在なしに生ずる評価の内発的な変化を記録する。被験者は提示された対象・話題について一定時間自由に話し、この音声録音される。次に、被験者は直前に録音された自分の音声を聞きながらマウス・ポインタを動かすことにより、対象を評価する。画面の中心には小さな円が描かれており、被験者の対象に対する評価が好意的な場合はポインタを近づけ、否定的な場合は遠ざける。実行プログラムはマウス・ポインタから中心までの距離を100msごとに計測し記録する。森尾(2003)は、こうして記録された、揺れ動く評価の軌跡のパターンから得られた情報が、心理学において伝統的に用いられてきたリッカート尺度によって測定された評価の変容を予測するために有用であることを実証した。彼らの知見は要約すると以下の2点である。まず、マウス・パラダイムを2回、説得的文章の提示を挟んで行った結果、被験者の態度は、社会において規範とされる多数派の意見の方向へと大きく変化する傾向にあった。この変化は、提示された説得的文章

の内容に関わらず、初期態度として少数派と分類された群に顕著であった。また、初期態度による効果は、態度構造の複雑性によって媒介されていたことも示された。この態度構造の複雑性は、マウス・パラダイムの手続きによって得られたポインタの軌跡をもとに、被験者の各対象に対する態度はマウス・ポインタの軌跡に基づいて、単純(単一のアトラクターを持つ)もしくは複雑(複数のアトラクターを持つ)な構造として分類することによって得られたものである。前述した社会的規範への回帰は、態度構造が単純な場合においてのみ観察され、態度構造が複雑な場合には見られなかった。

本研究ではポストホックに考案されたこれらの解釈を仮説として採用し、日本人という異なる母集団を持つ被験者を対象として、道徳性とは異なる種類の評価対象を用いて、同様の比較を行った実験の再検討を行った。

被験者は日本人学生59名であった、アメリカ人学生68名であった。測定対象となる態度は、共通で用いられたのは **Importance of recycling** と **Homosexuality** の2種類であった。また、日本人においては **リサイクル**、**同性愛**、**松井秀喜**、**小泉純一郎** の4種類、アメリカ人においては、**Ice Cream**、**Use of Personal Computer**、**Close Friends**、**Parents**、**“Life is full of changes,”** **“Life is full of contradictions.”** の6種類が分析に用いられた。

弁証法的思考の個人差の測定には、**Dialectical Self Scale survey (DSS)**、**Spencer-Rodgers et al, 2004**を用いた。このDSSには3つの下位尺度、**Tolerance for Contradiction**、**Cognitive Change**、**and Behavioral Change**がある。

4. 研究成果

図1に **Tolerance for Contradiction** の高い典型的なアメリカ人の結果、図2に **Tolerance for Contradiction** の低い典型的な日本人の結果を示す。これらの図では、中心からの距離の絶対値を時系列上に示している。

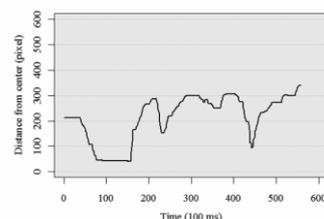


図1

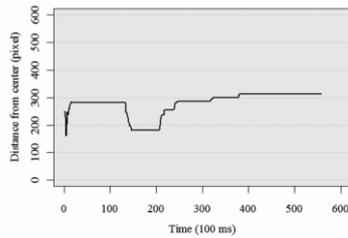


図 2

日本人はアメリカ人よりも、DSS の総得点が高いという結果が得られた。

また、マウスパラダイムから得られた各種動態的指標は、日本人の方がアメリカ人よりも、弁証法的思考を行っている、という結果が得られ、仮説は支持された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 3 件)

① 2011 年 7 月 1 日

Morio, H. (2011). Self-Enhancement among Japanese: Evidence from a classic paradigm. Presented at the Regional Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Istanbul, Turkey.

② 2011 年 2 月 28 日

Morio, H. (2011). Dynamical Formation of Attitudes: The Order-Effect on Smoking Intention After Possible Tax Increase. Paper presented at Society for Personality and Social Psychology Annual Meeting 2010, San Antonio, Texas.

③ 2010 年 7 月 9 日

Morio, H., Buchholz, C., & Yamaguchi, S. (2010). Denial of yard sticks: Consequence of the combination of volatile self-concepts and implicitly high self-esteem. Presented at the 20th International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Melbourne, Australia

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森尾 博昭 (MORIO HIROAKI)

関西大学・総合情報学部・教授

研究者番号 : 80361559

(2) 研究分担者 ()

研究者番号 :

(3) 連携研究者 ()

研究者番号 :